

# くまもと文学・歴史館報

くまもと  
文学  
歴史館

## 第2号 目次

巻頭言「スタートダッシュの一年」服部英雄	1頁
企画展報告	2頁・3頁
関川夏央講演会（抄）	4頁・5頁
出前講座報告 友の会事業	6頁・7頁
熊本地震報告	8頁
新収蔵資料	

地震の年として長く記憶されるであろう二〇一六（平成二十八）年、この激動の年が、リニューアルされたわがくまもと文学・歴史館のスタートダッシュの年であった。四月の絵図展こそは地震被害で中止となったけれど、夏の少女雑誌展、秋の漱石展、冬の上妻文庫展と順調に開催でき、「アーカイブズに見るくまもと」もこれまでに四回開催してきた。アーカイブズは館における用語では常設展と位置付けられているが、実態は館蔵資料を順次移動展示するもので、展示資料はその都度、入れ替わっている。

地震後再開時のアーカイブズにて、明治二十二年の熊本地震を詳細に語る公文類纂を展示できたし、夏には小山勝清生誕百二十年、秋以降には神風連事件をそれぞれ展示し、話題を呼んだ。すべてオリジナル・手作りの展示で、むしろ巡回展はない。

当館の課題のひとつに文学と歴史のコラボがある。少女雑誌を通じての近代の移り変わり、漱石を通じての百二十年前の明治の熊本が可視化され、神

風連展でも歴史からのアプローチと、文学に描かれた神風連の複数視点を通じての、接近が可能となった。

また上妻文庫展では、植物学者であった氏の撮影になる百年前の熊本県内各地の情景が注目された。リニューアルによる拡大効果である。これだけの回数の展示をスタートダッ



## スタートダッシュの一年

服部 英雄

（くまもと文学・歴史館長）

館も「震災の記憶と復興エール」と題する展示を計画している。そのなかではまず震災史を、当館資料によって展示する。史料が豊かな近世から近代にかけては、熊本藩、あるいは相良人吉藩における地震の記録を読み直すことにより、あらためてその恐ろしさに目を向けることになる。

寄せられた作品を読むと、たしかにその時はこうだったなとよみがえる。文学による同時代史であろう。また熊本にゆかりのある文芸作家から、はげましのことも色紙等であってほしい。それもあわせお目にかけることができる。

県民はわが館に対し、何を期待されているのだろうか。県民が知りたい熊本、県民が知らない熊本。それを具体的に示すことであろう。企画が実現するまでにはさまざまな案が生まれては消えつつ、最善案によって結果が示される。魅力的な案をいかに発想し、それをどう活かしていくのか。2サイクル目を迎える私たちへの期待にどうこたえられるのかは、そこにかかっている。

また「くまもと震災万葉集」を公募した。万葉集とは名付けたが、短歌、俳句、詩、肥後狂句、川柳、随筆などあらゆる文芸作品を対象としている。

また「くまもと震災万葉集」を公募した。万葉集とは名付けたが、短歌、俳句、詩、肥後狂句、川柳、随筆などあらゆる文芸作品を対象としている。

シユでこなしてきた。県民への発信は着実に、確実にできたと思うけれど、地震直後の混乱の最中でもあったし、それがどこまで県民に伝わったのかは不安である。またダッシュのままではいつか息切れするかもしれないから、コンスタントピッチをつかんでいきたい、とも思う。

四月には震災から一周年となる。当

それを表現した文学をひろく収集し記録することに意味がある、と考える。

四月には震災から一周年となる。当

それを表現した文学をひろく収集し記録することに意味がある、と考える。

服部英雄（はっとり・ひでお）  
一九四九年名古屋生まれ。九州大学名誉教授。東京大学大学院卒業後、文化庁文化財調査官として、史跡保存や世界遺産等を担当。一九九四年より九州大学で教鞭を執る。二〇一六年四月より現職。著書に『蒙古襲来』『地名のたのしみ歩き、み、ふれる歴史学』ほか多数。

# 企画展報告

## 「永遠の乙女達へ 少女雑誌とふろく展」

期間 平成28年7月21日～9月1日  
会場 展示室2・3

くまもと文学・歴史館がオープンして初めての夏休み、子供達に向けた展示として開催した。明治から大正・昭和、そして現代へとつながる少女雑誌とその付録を菊陽町図書館の協力を得て展示、紹介した。第一章「少女雑誌の系譜」では少女雑誌の発刊の流れを



資料とパネルで紹介。第二章「少女雑誌に見る文学」では、少女雑誌に執筆した川端康成をはじめとした著名な文学者と、熊本ゆかりの作家を紹介した。第三章「ときめきのふろく」では、当時の子どもたちが心待ちにしていた豪華なふろくを展示した。展示室3には、熊本マンガミュージアムプロジェクトの協力を得て、少女雑誌と一九七〇年代からの少女漫画雑誌を約千冊、手にとって読めるように設置した。毎日、漫画を読む多くの来館者の姿が見られた。

企画展の関連行事として、菊陽町図書館・少女雑誌の部屋の村崎修三氏と挿絵画家・落谷虹児氏の長男・龍夫氏による講演会を展示室3で開催した。

## 「来熊120年 漱石と熊本 —秋はふみ 吾に天下の志—」

期間 平成28年10月6日～11月14日  
会場 展示室1・2・3  
図書館ギャラリー

夏目漱石の熊本赴任一二〇年を記念し、熊本における漱石と当時の熊本を紹介する展示会を開催。松山市立子規記念博物館、みやこ町歴史民俗博物館、熊本大学五高記念館の協力により、町指定文化財を含む漱石関連資料五十三点が並んだ。このような貴重資料の借用・展覧が可能になったのは、リニューアルによる館の機能拡充のためである。おもな展示資料としては、当館が所



蔵する漱石自筆の句稿や書簡、学生時代の漱石が、初めて「人に読ませる」ことを意識して書いた漢文による紀行文「木屑録」(みやこ町歴史民俗博物館蔵・同町指定文化財)、二枚にまたがって漱石愛用の「漱石山房」印が捺された俳句短冊(個人蔵・松山市子規記念博物館寄託/個人蔵)、五高開校記念式祝辞(熊本大学五高記念館蔵)など。なかでも漱石が正岡子規に添削を求めた句稿は、もともと一揃いだっただけものが軸装の際三巻に分割された。今回、別れて伝わった二巻が執筆地である熊本へ里帰り。当館所蔵の一巻とあわせ、その全貌を紹介した。

また展示室3には「漱石の本棚」が登場、当館が収集した漱石関連の図書・漫画作品など約四百点が自由に閲覧できた。

そのほか関連行事として、熊本で多くの俳句を残した漱石にちなんだ俳句ワークショップ、坪内稔典氏、関川夏央氏を講師にお招きした記念講演会が行われた。



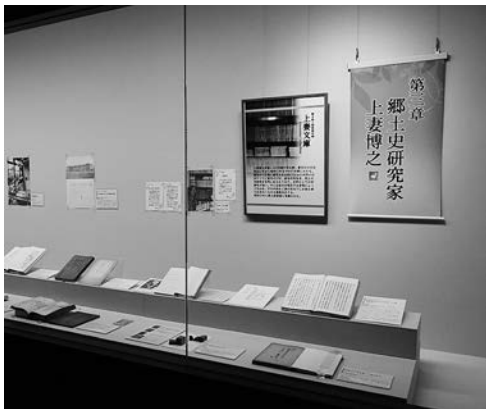
講演する坪内稔典氏

# 「上妻文庫展 上妻博之が遺したもの」

期間 平成29年2月2日～3月6日  
会場 展示室1・図書館ギャラリー

平成二十九年に没後五十年を迎える上妻博之を記念して、熊本県立図書館が所蔵する「上妻文庫」を紹介する展覧会を行った。

上妻博之は、昭和二十四年に、博物学・天然記念物の調査保存と郷土資料調査研究の功績により熊本近代文化功労者として顕彰されている。今回は、植物分野と歴史分野の大きく二つのテーマに分けて七十七点の資料を展示した。植物分野では、上妻自身が作成した



講演する東矢力也氏

植物標本や、生涯の師である牧野富太郎の書軸や書簡、昭和六年の陸軍特別大演習の際に上妻らの指導によって作成された「天覧標本」等を展示した。また、上妻らが熊本県史蹟名勝天然記念物調査委員となって昭和初めから約二十年かけて撮影した熊本の老樹名木や名勝・民俗関係の九百三十九枚のガラス乾板をデジタル化し、その一部を紹介し、併せて図書館ギャラリーでも「上妻博之の遺した写真」として三十四点を展示。(四月十日まで)

歴史分野では、約四百四十点の「上妻文庫」写本群の中から、二十二点を選び、その奥書等に記されたエピソードを紹介。通常は複製しか閲覧できないが、本物を展示し、その筆跡や、色使いを間近にご覧いただいた。

二月十一日には、熊本記念植物採集会会長の東矢力也氏による記念講演会「上妻先生とこうもり傘」を開催し、好評を得た。

# 収藏品展 アーカイブズに見るくまもと



「くまもとの記憶」をキーワードに、くまもと文学・歴史館と熊本県立図書館が所蔵する歴史史料と近代文学資料を展示室1で順次展示する。

## ●アーカイブズに見るくまもと3

平成28年6月15日～7月25日

平成二十八年熊本地震に因み、明治二十二年熊本地震に係る史料を展示したほか、津浦村(熊本市中央区)の検地帳や人吉藩領に係る史料と絵図、幕末明治の蒸気船に係る史料を展示。文学展示として種田山頭火や棟方志功、木下順二らの資料に描かれた熊本風景を紹介した。ギャラリー展示は平成二十八年六月一日～九月一日に「江津

湖に花開いた文学と古写真に見る記憶」を開催。

## ●アーカイブズに見るくまもと4

平成28年8月3日～9月26日

山室村(熊本市北区)の検地帳や「戦国大名相良氏に見る父と子」と題し、戦国大名の父子に係る史料を展示。神風連前夜の情勢も展示。生誕百二十年を記念して小山勝清の自筆原稿や歌稿ノートを展示。

## ●アーカイブズに見るくまもと5

平成28年12月8日～

平成29年1月23日

歴史史料では立田村(熊本市北区)の検地帳、相良義陽が戦死した響野原合戦の史料を展示。神風連の決起から百四十年を記念して「1876神風連140年」と題して文学資料と歴史史料で神風連を紹介。ギャラリー展示は平成二十八年十二月八日～平成二十九年一月三十一日に天草市立天草アーカイブズ出前展示「離島の振興―国立公園・架橋・観光―」を開催。

## ●アーカイブズに見るくまもと6

平成29年3月13日～4月3日

テーマは前回に引き続き「1876神風連140年」。公文類纂や書状などで神風連を展示。

## 関川夏央講演会

## 演題 「漱石作品の読者は子規」

期日 平成28年10月30日  
 会場 水前寺共済会館グレイシア



## 日本の近代文学の始まり

日本の文芸は寛政年間ぐらいから商業化・産業化し、職業小説家が生まれました。滝沢（曲亭）馬琴こそ世界最初の職業作家といえるでしょう。

木版だった出版は明治十年代から活版が主力になり、そういう流れの中で日本近代文学は成長しました。二葉亭四迷が坪内逍遙の名前を借りて出した本『浮雲』、ここから近代文学が始まるわけですが、もう一人の代表的な作家が尾崎紅葉です。

その尾崎紅葉が明治三十年一月一日から読売新聞に始めた『金色夜叉』は

新聞小説のヒット作の最初です。そのとき漱石は熊本第五高等学校にいて、正月に里帰りをしたとき東京でかつての東大同級生の小説を読み始めた。かなり期待をしていたと思います。ただし、この小説には限界があります。尾崎はまだ古い文士気質ですから、産業構造そのものに目を向けていない。アメリカのキリスト教小説バーサ・クレイの小説を翻案して書いたのですが、そのときに新しい経済を組み込まなかった。現代的産業のかわりに古典的高利貸を設定した。

私がここでみなさんの注意を促したのは、漱石が明治四十年ごろの出版業隆盛の時代、すなわち単行本から雑誌中心の時代、第二の革命期の後に専業作家になったということです。そして、それ以前から無意識のうちに専業作家、小説家となる訓練を始めていたことをお話ししたいと思います。

その背景には漱石のロンドン留学というものがある。これは我々が普通に

考えている以上に大きな影響を与えたのではないかと考えているわけです。

## 漱石のロンドン留学

漱石は一九〇〇年ですから、明治三十三年九月八日にドイツ船に乗ってロンドン留学の旅に出ます。「秋風の一人を吹くや海の上」は、出発前に寺田寅彦に送った句です。横浜を出て南へ南へと下っていくわけですが、南洋ではただ暑いだけ。俳境は熱帯では湧きません。ヨーロッパも、石畳の道とか石造りの家で、どうも俳句には向いていないですね。

香港からシンガポール、コロンボ、アラビアの先端アデンから紅海を北上してスエズ運河に至るのですが、寄ったすべての港は英国の植民都市でした。漱石に限らず留学生が実感すること、ひとつは英国の強大さ、もうひとつはヨーロッパの遠さです。

大体四十日でヨーロッパ、つまり全然別の文明圏に到達、イタリアのジェノバに上陸するわけです。緊張感が高まりますが、船のスタッフへのチップの計算をしなければいけない。四十日間それぞれ同じ人に世話になっているので、一人現在の価値で十五万円、五人だから七十五万円ぐらいを払えばいいだろうと相談して渡します。ジェノバに上陸して、ここで生まれて初めて

エレベーターに乗ります。困ったのは英語が通じないし、ドイツ語も一切通じないことでした。ジェノバからトリノで乗り換えてパリに行くのですが、ここでも英語が一切通じない。これには五人ともびっくりしました。

実は、漱石はスエズ運河を出るときに、ポートサイドで英字新聞を久しぶりに買いました。その新聞に、日本で内閣がかわったと出ていました。山縣内閣が倒れて第四次伊藤内閣になった。そのあたりで漱石の義父は失職し、帰国後の漱石に経済的に頼るようになります。やがてこれが桂太郎内閣になる。桂と西園寺が交代で首班を務める桂園内閣ですね。

## ロンドンの印象

パリでは万博を見学します。それから四人はドイツに、漱石は一人英国に向かいました。孤独感がいやが上にも募るロンドンで彼を苦しめたのはひどい大気汚染でした。工場でも家庭でも交通機関でも石炭をガンガン燃やすわけです。さらに一番彼を驚かせたのは異常な物価高です。文部省から毎月留学費として、いまのお金にして百六十万円ぐらいもらっていましたが、下宿代が二食付きで八十万円ぐらいはかかるのですから大変です。

漱石が着いたのが一九〇〇年十月末、

年が明けて一九〇一年（明治三十四年）は二十世紀の始まる年です。この一月二十二日にビクトリア女王が亡くなった。漱石が弔慰を表すため黒いネクタイを買いに店に入ると店員が、「新しい世紀は何となく不吉な感じで始まりましたね」と漱石にいます。

漱石は下宿代の高さに音をあげて四回引越しますが、月に八十万円より安い所はありません。結局大学に行かないで週に一回、火曜日に一時間だけクレイグ先生というシェークスピア学者のもとに通うことにするのですが、その謝礼が一回七シリング、今の感覚で三万五千円でしょうか。ポンドは異常なまでに高く、円は不当に安かったということでした。

漱石が下宿した四軒とも女の人が経営していました。当時、ロンドン市民中の年配の女性たち、とりわけ独身者は一人で生きていくために下宿屋を営んだので、それが漱石の見た、二十世紀初めの英国、あるいは資本主義の最先端の姿でした。

### 鏡子の手紙と「ホトトギス」

ロンドン時代、鏡子夫人は漱石に全然手紙を書いてくれないのです。漱石は心が弱っていますから手紙を催促します。何度か催促するうち、明治三十四年一月二十四日留学後二通目の手紙

が届くのですが、実に下らないことが書いてあります。

漱石が鏡子さんに、「手紙を書いてくれ。こんなおれでもお前が恋しい」と言ったのは本当だと思えます。そして後になって「自分は人の書き物をあれほど待ちわびたことがあったらどうか」と回想します。つまりこのとき漱石は「手紙」という作品を心から待つ読者であったのです。この立場は漱石が初めて経験したことだと思います。

そして、ほぼ同時期に「ホトトギス」、高浜虚子が編集している雑誌が届きます。その虚子に頼まれ、明治三十四年四月五日ロンドン報告の原稿という長い手紙を書くわけです。旧友子規がしきりに主張していた写生文で書かれたそれが「倫敦消息」の二と三です。この原稿では、「私」の苦しみとか悲しみとか「私」の気持ちは一切出てこない。ただ環境にとまどい翻弄されるだけの異邦人の「私」の混惑のみがえがかれます。自己を客観視している非常に面白い原稿だと思います。

日本の近代文学には押しつけがましい「私」の自己主張と自己憐愍がつきものですが、それとは無縁です。私は漱石がなぜ今も読まれる理由はこれだと思えます。

つまり漱石はいわゆる近代文学ではない。社会と経済とによって翻弄される

客観的な状況を描いたという意味で、現代文学です。漱石が近代文学を通らなかつた、通る必要を感じなかつた一つの大きな理由は、やはり留学だと思えます。そして留学中だからこそ自己客観する写生文が書けたのです。

この年の十二月、「僕ハモーターニナッテシマッタ」という手紙が子規から届くのですが、短い見舞いの手紙を送っただけで「倫敦消息」の続編は書きませんでした。

### 帰国直前の子規の訃報

さらに一年後、日本に帰る前の週に訃報を知ります。子規はあれほど「倫敦消息」を読みたいと言っていたのに、続編を書いて、やらなかつた自分が悪い。自分は「読者」の期待に答えられなかつた。鏡子は、自分が「読者」であるとき、見当外れでもちゃんと手紙をくれた。あれこそが読みたい原稿・作品だった。それにひきかえ、正岡君が読みたがる原稿を自分は書けなかつた。そのことは心の悔いとしてずっと残った。

その瞬間、アデン以来つくれなかつた俳句ができたわけです。「筒袖や秋の柩にしたがわず」。そう思いながら漱石は船に乗って日本に帰ってきますが、この旅は、『坊っちゃん』の松山

行きの旅とよく似ています。

松山の下宿の縁側で坊っちゃんが読んでいた清からの手紙は、四尺の長さで風に吹き流される巻紙の手紙でした。何が書いてあるかよくわからないが、丁寧な読み方しなければならぬ手紙です。これは鏡子が書いてロンドンに送ってきた手紙と同じです。どうでもいいようなことを書いてあるけれども、心がかもっている。恐らく『坊っちゃん』に出てくる清（キヨ）は鏡子（鏡子キヤウ）の転訛だと思います。

そうして、坊っちゃんは「不浄の地」松山を去るわけですが、その松山の思い出と、ロンドンの思い出が重なるのです。だから『坊っちゃん』はロンドン体験の、つまり「倫敦消息」の続編として読まれてよいと私は思います。

（関川夏央講演会は、企画展「来熊一〇〇年 漱石と熊本―秋はふみ吾に天下の志―」の記念講演会。くまもと文学・歴史館友の会、熊本県文化協会との共催事業。）

関川夏央（せきかわ なつお）

一九四九年新潟県生まれ。作家。著書に、『海峡を越えたホームラン』（講談社ノンフィクション賞）、『坊っちゃん』の時代（手塚治虫文化賞）、『昭和が明るかった頃』（講談社エッセイ賞）など多数。二〇〇一年、業績全体に対して司馬遼太郎賞。

# 出前講座「くまもとの文学と史料をひもとく」

くまもと文学・歴史館、熊本県立図書館の所蔵資料に関連するテーマの講演会や展示会を、くまもと県民交流会館パレアや県市町村、博物館と共同で企画する「くまもとの文学と史料をひもとく」を九月―三月まで県内各地で開催した。

## 出前講座 第2回菊池一族歴史交流シンポジウム

●菊池市文化会館大ホール  
平成28年10月16日

菊池市が「菊池秋まつり」に合わせ、菊池氏を縁にした姉妹・友好都市との「つながり」の再認識を目的にシンポジウムを開催。服部英雄館長が「九州と菊池一族」と題して基調講演。シンポジウムのコーディネーターも務めた。



「九州と菊池一族」を講演中の服部英雄館長

## 出前講座 相良村誕生60年記念

●小山勝清生誕120年記念講演会  
●相良村総合体育館2階アリーナ  
平成28年10月22日

館蔵資料による小山勝清ミニ展示には地元在住の住民や講師の上田精一氏（元中学校教師）の教え子や元同僚が集まった。出前講座は上田精一氏が「私の中の大叔父・小山勝清」と題して講演会。服部館長が講師の上田氏を紹介し、また勝清の歴史学者・民俗学者・児童文学者・歴史文学者といった多様なプロ



相良村誕生60年記念・小山勝清生誕120年記念講演会



相良村誕生60年記念・小山勝清ミニ展示

フィールにも触れて講演会に繋がった。

## 出前講座 世界文化遺産候補

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」、「天草の崎津集落講演会」基調講演

●ホテル熊本テルサ1階テルサホール  
平成29年1月15日

出前講座 第1回天草地域世界遺産登録推進連絡会議、第2部講演会「世界遺産登録を目指す、天草のキリシタン文化遺産」

●天草市民センター1階大ホール  
平成29年2月17日

平成三十年七月の世界文化遺産登録を目指して世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の準備が進められている。この機運醸成を目的に熊本県・天草市と講演会を共催。学術委員長を務める服部館長が天草の「遺産」の価値を説明。

この他、八代市立博物館未来の森ミュージアムでの第五回八代連歌会、くまもと県民交流館パレアでの「江湖に花開いた文学と古写真に見る記憶」の展示などを開催。いずれの会場でも好評を博した。

## 新収蔵資料

○小山勝清書簡（大杉久雄宛）

現相良村出身の作家小山勝清が、代表作『それからの武蔵』を刊行した東都書房の大杉久雄宛に送った書簡二十三通。昭和三十九年五月から四十年十月まで。

ここに見られるのは昭和四十年十一月二十六日に亡くなる小山の最後の筆づかいである。病気の進行や手術等の報告のほか、文学についても積極的に書いている。

かつて柳田国男のもとで民俗学を学んでいた小山は、民俗学の考え方を自身の文学と結び付けた「民俗主義文学」を提唱した。本資料においても、病床で口述し仕上げた『民俗主義文学論序説』のことや、執筆した少年小説と民俗主義文学との関係などが語られ、自身の文学論を形にすることに懸命であった小山の姿が読み取れる。



# 友の会事業

## くまもと文学・歴史館友の会総会

平成28年5月21日にくまもと県民交流館パレアで開催。新しい代表世話人に田代格（たしろ・いたる）氏が選ばれた。平成27年度の事業・会計報告、28年度の事業・予算計画、新世話人決定、くまもと文学・歴史館の名称変更に伴う規約の変更などが行われた。

## 定例事業

○月案内発行 くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。  
○文章勉強会 毎月一回開催。有志による文章講座

○歴史勉強会 毎月一回開催。文学・歴史館職員を講師とする古文書講座

◆湧水24号発行  
会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆「平成28年熊本地震作品集」刊行



熊本地震で「被災者」となった友の会のメンバーが、自らの体験を綴った作品集。ジャンルは俳句、川柳、短歌、現代詩、エッセイと多岐にわたり、三九タイトルの作品を掲載。

私たちの会は、熊本近代文学館の頃から数えると、この三月一日で三十年を迎えた。ふりかえって考えてみると文学館と友の会との関係は、親子にたとえてもよいような気がしている。すなわち文学館にとって友の会は無条件で養育しなければならぬ対象であったし、友の会からみれば文学館の視線と期待をいつも背中を感じながら、それでも自由に育てられてきたというイメージが強い。このたとえに不都合がなければ、親として最初に友の会のしつけをされたのが初代近代文学館長の光岡明生であった。

### 特別寄稿

## 30年を迎えた友の会

くまもと文学・歴史館友の会  
代表世話人 田代 格

感がうかがわれて興味深い。その頃私との雑談で「館長職は辞めても初代館長の肩書はこれからもずっと残るからね」そう言われたこともあった。今にして思えば直木賞作家としての自分に、自ら対応の義務と責任を負わせて館長職に全力投球をされていたのであろうことが想像される。

その後文学館時代に四人の館長をお迎えしたが、館と友の会の基本的関係は守られてきたように思う。  
ところで親子にとって昨年、平成二十八年は大変な年であった。一月下旬に文学館が「くまもと文学・歴史館」としてリニューアルオープン。歴史学者、服部英雄氏の館長就任。学芸員の配置……。この激変は子

にとつてみれば、シングルだった親が突然新しいパートナーを得て三人で同居をはじめたような戸惑いなのである。四月十四・十六日の「熊本地震」の記憶も生々しい。江津湖を母港とする「くまもと文学・歴史館友の会」の船が何処へ向かって航海するのか、不安と期待が半々である。

## ○耕治人書簡（渡辺義夫宛）

耕治人が渡辺義夫に宛てた書簡三十四通。昭和三十四年から六十一年まで。うち二通は耕の妻ヨシ子を書いたもの。耕は昭和三十二年に郷里八代高校の校歌「道」を作詞したが、同校に勤務していた渡辺を通じ、著書を寄贈していたことなどが本資料から分かる。渡辺が刊行していた雑誌「文芸八代」に関する記述も散見される。

のちに渡辺は文芸雑誌「詩と真実」を主宰、小説や評論をものすなど、文学的な活動を続ける。東京で執筆する耕は、郷里熊本で活動する文学の後輩・仲間として渡辺に親しんでいた。渡辺へ、創作や出版、文学活動についてのアドバイスのほか、訪熊に関する連絡やザボンのお札などを述べ、二人の親しいやり取りがうかがえる。



# 熊本地震報告

## 熊本地震の被害について

### ●二度にわたる地震の発生

平成二十八年四月十四日午後九時二十六分、そして、十六日午前一時二十五分の二度、熊本地方は、最大震度7の激震に襲われた。「地震の少ない土地」という熊本県民の「思い込み」を覆すような出来事だった。当館は、熊本県立図書館の附属施設として同じ建物の中に設置されている。最初の地震では、図書館内の本の落下など、比較的軽微な被害にとどまったが、後に本震と修正された二度目の地震は、前震



に数倍する激しさで、はるかに大きな被害をもたらすことになった。

### ●館の被害と復旧

前震ではほとんど被害の認められなかった当館も、本震後は、展示室内の行燈型のケイ・スー一基が転倒・破損した。図書館



部分では、吊り下げた照明が落下、ゆがんだ書架からは書籍が落下、おびただしい本が腰の高さほども積み重なった。その日から、収蔵資料の全点確認、施設の補修、本の移動と、ひたすら震災に伴う復旧作業が続いた。比較的被害の少なかった当館は六月一日から再開にこぎつけたが、二・三階を占める図書館部分は復旧工事が進まず、一階の子ども図書室以外の閉鎖を余儀なくされた。なお、この間、北九州市立

文学館並びに九州歴史資料館をはじめとする複数の機関から、復旧支援のお申し出をいただいたのは忘れることができない。

### ●防災の教訓

当館は昨年一月二十八日にオープン

したばかりで、施設改修の直後であった。展示室内の行燈ケースは転倒・破損したものの、飛散防止フィルムのためガラスの破損が最低限に抑えられ、中に展示中の資料は無傷であった。また、文学資料を収める収蔵庫では、棚に資料の落下防止ベルトを装備していたため、落下した資料はほとんどなく、外装の箱の破損などを除けば、貴重資料自体の破損はほとんど認められなかった。フィルムとベルトについては、当初は予算の関係で見送られる予定だったが、展示アドバイザーを務めていただいた外部有識者の助言により導入されていた。防災対策の重要性を痛感させられた。

### 今後の取り組み

さて、当館では、六月一日の再開館にあたって、当館蔵の「明治二十二年熊本縣大震始末」という、明治の熊本地震を記録した県庁資料を展示し、多数の観覧者の注目を集めた。また平成二十九年度は、熊本地震一周年を機に、四月十四日～五月二十九日の予定で、「震災の記憶と復興エール」と題した企画展を準備中である。図書館蔵の資料により、過去の熊本における震災と復興の歴史をひもとくとともに、全国の文学者などから寄せられた復興への応援メッセージを紹介する展示である。

## くまもと文学・歴史館のご案内

### 所在地

熊本市中央区出水2丁目5番1号  
(熊本県立図書館内)  
電話(096) 384-5000(代)

### 開館時間

午前9時30分～午後5時15分

### 休館日

火曜日・毎月最終金曜日  
年末年始・特別整理期間

### 入場料

無料

### 最寄りの交通機関

(1)市電Ⅱ「市立体育館前」下車・徒歩5分  
(2)バスⅡ「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

### 友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合わせ下さい。

くまもと文学・歴史館報  
第2号  
平成29年3月31日発行  
編集発行 くまもと文学・歴史館  
〒862-8612  
熊本市中央区  
出水2丁目5番1号  
電話 384-5000(代)  
(096)  
FAX 385-4214  
(096)